

乳児期親子の関係性支援における保育士訪問に関する研究 ～支援プログラムを活用した家庭訪問運営体制の 実践的取り組みの検討～

山村 裕子¹ (Hiroko YAMAMURA)・岩本 直子² (Naoko IWAMOTO)

鳥取短期大学 幼児教育保育学科¹ 鳥取短期大学 非常勤講師²

【背景及び目的】

現在、国内では出生早期から家庭訪問（新生児訪問事業・養育訪問事業等）が実施されているが、これらを担当する専門職は看護職（保健師、助産師、看護師）や保育士である。この事業は各自治体の自助努力によるところが大きいとされ、専門職が自信をもって支援できるための共通したトレーニングやガイドラインは、全国的な整備がなされていない。家庭訪問時の援助方法などの援助技術の継承に人材問題の様々な課題があるとされるが、それらについての課題や評価も各自治体に任されている。

出生早期からの子育て支援において、親子が愛情に満ちた相互作用を繰り返すことで可能となる安定した関係性構築に関する支援は、親子の現状を踏まえたアセスメントと、その時期に必要な知識や関わり方等のスキルの伝達が親子に寄り添った形で展開される必要があり、そのための理論的な根拠が重要である。欧米では20年以上前からこの乳幼児精神保健の研究実践が繰り返され、国内でも虐待予防の観点から、全ての親子に早期から関わることでできる専門職が親子の関係性構築のための支援プログラムを活用することを目指し、廣瀬ら¹⁾はその取り組みの必要性の研究報告を重ねているが、研究は多い一方で実践においての取り組みは少ない。

今回、退職後も保育士が地域で活躍する新たな活動モデルとなりうる保育士訪問部門を民間の県内産後ケア施設の新たなサービスとして紹介し、支援プログラムを活用する研修受講と保育士訪問人材派遣及び実施運営を行い、実施可能な家庭訪問運営体制を検討することとした。

【活動（研究）の概要】

1. 産後ケア施設「やわらかい風」にこにこ♥ねんね保育士訪問事務局の立ち上げ事前準備
(家庭訪問報告関連様式作成、保育士訪問必要物品の検討、訪問時の注意事項共有、研究活動啓発ちらし作成、家庭訪問支援スケジュール及び内容例の検討)
2. 限定的周知による訪問サービスの実施
(日程調整および連絡体制の整備、支援希望内容を踏まえた個々の家庭訪問支援内容設定、訪問担当者派遣 延べ5件×4時間)
3. 訪問実践後の利用者・家庭訪問担当者の振り返り評価
(利用者の感想・評価、訪問担当者の報告書作成、子育て支援プログラム NCAST 研修受講による家庭訪問支援時の関係性評価の振り返り)

【成果及び課題】

1. 活動状況

令和4年度初夏から冬にかけて新型コロナウイルス感染症の県内感染拡大期のフェーズとなり、家庭訪問日程調整には難しい局面もあったが、外出しにくい乳児期の親子の家庭訪問に対するニーズは高く、保育士による実践は好評だった。5件と実践件数は少ないが、主に家庭内の環境構成と月齢に合わせた発達を促す遊び（人的・物的環境）の実践や助言、入園に向けての相談援助、託児について、乳児期の保護者らは共通して求めている。また、限られた活動予算枠内で希望者を募る際に優先順位をつけた結果、多胎児家庭（多胎児+きょうだい児）の希望が重なった。その場合に複数回を望む家庭もあった。

2. 利用家庭の反応と担当した保育者の声から現時点で考えられるニーズ

利用者の感想の中には、「3つ子のため子どもたちを外に連れ出すことが困難な中、自宅での託児は本当に助かった。3つ子であるからこそ、外部の方の支援をお借りしたいのに、3つ子だから断られる事が多い（保育園の1日預かりなど）。外出困難で外部との接触が持ちにくい方のために、こういった活動があると大変心強く、感謝しかない。」という切実な声が聞かれた。これらのことから、コロナ禍の環境とは関係なく、乳児期早期からの継続的かつ公的支援（産後ケアサービス、養育訪問支援事業等）の対象外となる家庭の中には、一般的な子育て支援サービスの社会資源（一時保育、子育て支援センター、ファミリー・サポート・センター等）を利用したいと思っても、人手が足りないなどの理由から物理的に利用できない家庭があることがわかった。多胎児家庭を代表的として、これらの自ら出向き利用する既存サービスを利用したくても利用できない家庭では、乳児期の孤立化の課題が増幅していると言える。そのため、家庭訪問によるアウトリーチ型支援の拡充が必要であると考えられた。また、「この事業を必要としておられるお母さんがたくさんおられると思うので、是非発展してもらいたい。」「私自身とても良かったので、県全体に広がって皆さんが良さを知ることできたらと思う。」といった活動の発展を希望する声も聞かれ、保育士の細やかに行き届くアウトリーチ型支援へ期待感が感じられた。子育て支援プログラム NCAST 研修受講後、家庭訪問を担当した保育士は、利用者ニーズに対する期待感が高め、やりがいを感じたが、家庭訪問時の関係性評価には実践回数が少ないこと、そして希望者への家庭訪問を支えるバックアップ体制の構築が必要という意見が出た。試行的な取り組みとして公立保育園保育士 OG 2名が担当したが、退職後の活動の場となる可能性があると考えた。現在、国内の保育士によるアウトリーチ型支援のサービスは、児童虐待防止法の観点からの「養育訪問支援事業」や、障害児対象とした「地域型保育居宅訪問型保育事業」、あるいは「産前産後ヘルパー事業」として家事援助が中心であるものなどがあり、徐々に全国的に普及しつつあるが、県内ではいずれのサービスにおいてもまだ展開する事業所は少ない。

3. 今後の活動の展望と考えられる現在の課題

本活動の支援内容で利用家庭のニーズとして合致したものは、保育士の専門性を生かした遊びや生活を通しての援助であり、乳児期からの親子の相互作用を円滑にし、関係性を育む支援である。従来から実施される乳児期の家庭訪問事業（母子保健法規定）としての「新生児訪問指導」や「乳幼児訪問指導」は、行政あるいは地域の助産師・保健師が担当する。研修等を行政機関主催で受けるが、家庭訪問時の乳幼児期の著しい発達を踏まえた個別性の高い相談援助は難易度が高いものであるため、各家庭の環境構成や遊びの実践、乳児期以後の具体的な入園に向けての相談援助は、個々人の能力に左右される支援内容となるだろう。つまり、この乳児期の支援内容は、保育士の専門性を生かした支援であり、入所前の乳児親子にとって必要性が高いものである。さらに、乳幼児精神保健に関する知見（親子の関係性構築に関する知識の向上）を用いた子育て支援プログラムを保育士が活用しながら家庭訪問を行うことは保育所等入所前の親子への支援として地域の子育て支援の強化となりえる。今

年度の取り組みは実践件数が少なかったため、今後も継続的な評価を行っていく必要がある。

4. まとめ

乳児期親子の関係性支援における保育士訪問はニーズが高く、保育所等児童福祉施設以外の保育士の新たな活躍の場としての可能性高いものである。また、現在、保育士人材上の課題といえる潜在保育士らは、保育士自身の子育て休暇明け以降の現場復帰の足掛かりとなったり、新たな保育の展開となりえ、潜在保育士の雇用促進へつながる可能性があると考えられる。子育て王国とよりの新たな施策の展開として、期待できるものとする。

5. 謝辞

本活動の趣旨に賛同し、ご協力いただきました利用者の皆様、米村真由美さま（元鳥取市立保育園長）、川口映子さま（産後ケア施設「やわらかい風」代表、助産師）に深く感謝を申し上げます。

《参考文献》

- 1) NCAST Publications Seattle, Washington (1994)：日本語版監修及び出版、廣瀬たい子, 「NCAST-AVENUE W 養育者／親—子ども相互作用 ティーチングマニュアル日本版」, 2006 ほか